TIPS シリーズの刊行にあたって

「日本語教師のための TIPS 77」シリーズは、日本語教育に関わる方々が、日本語教育のいろいろな分野の知識を整理したり、アイデアを得たりするリソースとなることをめざしています。自分の教室にすぐに応用できる知識・アイデアを提供する本シリーズは、多様な読者の方々に対応できる内容となっています。たとえば、日本語教育に長年携わっている方々にとっては、ご自分の知識を整理、確認するのに使えるでしょう。一方で、日本語教育にこれから携わる方々や、経験が少ない方々にとっては、新しい知識や明日のクラスのアイデアを得るための情報源となるでしょう。大学や教師養成機関では、副読本や参考書として使用できます。また、日本語教育関係者のみならず、英語教育・国語教育といった「ことばの教育」の関係者にとっても役立つ内容が、豊富に含まれています。

本シリーズには、以下のような特徴があります。

- 専門知識がなくても内容が分かるように、専門用語を避け、やさしく説明しつつ、重要な点が分かるように書かれている。
- 教室での実際の教育活動にすぐに役立つように、実践的、応用的な側面を強調している。
- それぞれの TIPS の説明は短めで、素早く読める。
- 必要に応じて、図・グラフ・表・フローチャートなどを入れ、内容を分かりやすくしている。
- TIPS は、教育活動にすぐ応用が利く 77 本を厳選している。
- 執筆者は、各分野の第一線の実践者・研究者である。

本シリーズの各書が提供する TIPS は、「知っておいてほしい」「知っておくと得をする」「知っておかなければならない」などの情報が満載です。本シリーズを通じて、日本語教育という分野の奥深さと幅広さを実感してくだされば幸いに存じます。

監修者
當作靖彦・横溝紳一郎

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

はじめに

本書内にもありますが、私は必ずしも自分から音声教育に進んだわけでもないし、それ以前に、自分から日本語教育に進んだわけではありません。しかし、教育とは直接、人に対して責任のある仕事なので、能力がないなりに、真摯に取り組んできたつもりです。その中で、学習者や同僚にいろいろほめられたり、感謝されたり、頼りにされたりすることで、自分が認められるようでうれしくて、さらに努力しようと思ってきました。

今でも、大学院浪人時代の本当につらかったことはずっと頭から離れません。お金に困っていたこともありますが、それよりも、誰も自分のことなんか気にかけていない、自分なんていなくなっても誰も気づかないんじゃないか、むしろ、いなくなったほうが迷惑をかけなくてすむんじゃないかと、ずっと自分の存在を認めることができませんでした。そんな自分が、日本語教育をすることで、ほめられたり、感謝されたりするのですから、うれしくてがんばらないはずがありませんでした。

しかし、ほめられたりするだけで満足したわけではありません。うまく教えられないこともたくさんあり、いや、うまく教えられないことのほうが多かったように思います。そのときは、自分で授業を振り返って考えたり、教材や参考書などを調べたりしました。その中でも音声教育は、いろいろ調べても納得がいかないことが多く、「自分が知りたいのはそんなことじゃない!」と、研究と教育現場のずれの大きさを常に感じていました。そのような思いから、音声教育の研究や実践を始めたように思います。また、それと同時に、生身の人間である教師の存在意義が最も問われるのも音声教育であり、そのためにも音声教育の研究や実践が重要だと思っています。

本書の執筆依頼をいただいたときに、音声教育で困っている教師に絶対に役立つものにしようと思いました。しかし、それは「明日の授業に役立つ」ことだけを指しているのではありません。音声教

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

育で役立つものと言うと、こうやって教えるとうまく発音矯正できるというような方法が思い浮かびますが、それではうまくいかないことは、参考書を調べた経験などからいやと言うほど痛感しています。「唯一絶対の教授法はない」は、もちろん、音声教育にも当てはまります。明日の授業に役立つだけでなく、明日の授業について自分で考えるヒントになることや、あさって、しあさって、1年後、10年後、30年後の授業にも役立つことをできるだけ具体的に書いたつもりです。本書が、音声教育を実践するのをためらっている先生方の背中を押すのに役立ち、その結果、よりよい音声教育につながっていくことに貢献できれば、この上ない幸いです。

本書では、8つの外国語話者の日本語の誤用が扱われています。その録音にご協力くださった、外語ビジネス専門学校日本語学科、興和日本語学院、聖潔大学校日語日文学科、ミドルベリー大学日本語学校、国際交流基金カイロ日本文化センター、ヨルダン大学、学校法人HIRO学園のみなさん、金子真弓先生、水越隆之先生、相澤由佳先生、ポール・ガニェ先生、村上吉史先生、中山裕子先生、丸井合先生、川口直巳先生、奥村匡子先生ほかたくさんの方々に感謝いたします。また、そのほかの音声や映像、写真にご協力くださった方々にも感謝いたします。

監修者の當作靖彦先生、横溝紳一郎先生にも感謝します。コメントをいただきながら、「それはまだまだこれから研究と実践を通して明らかにしていくことであって、本に書くことはできないんだ!」というものがかなりありました。もっともっと努力して、少しずつでも感謝を形にしたいと思います。

最後に、なかなか執筆が進まない私を本当に温かく、かつ、的確にご支援くださった、くろしお出版の原田麻美さんに心から感謝いたします。

2014年2月

河野俊之

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

目　次

TIPS シリーズの刊行にあたって 3
はじめに 4
お読みいただく前に 6

Chapter 1　音声教育の実際について考えるための TIPS..... 11

1. 音声教育のニーズについて考えてみよう 12
2. 発音がいい学習者とはどういう学習者なのか考えよう 14
3. 発音への関心を持たせるにはどうしたらいいか考えよう 17
4. 音声教育の問題点について考えてみよう 20
5. 「何が違うか分からない」「方法が分からない」について考えよう 23
6. 「学習者にいやがられる」について考えよう 26
7. 「分かったけどできない」について考えよう 29
8. 「通じればよい」について考えよう 32
9. 「元に戻る」について考えよう 35

Chapter 2　自己モニターを活用した音声教育を考えるための TIPS ..39

10. 言い分けの独自の基準を考えよう　自己モニター１ 40
11. 聞き分けの独自の基準を考えよう　自己モニター２ 43
12. 聞き分けの練習について考えよう　自己モニター３ 46
13. 聞き分けの独自の基準作りについて考えよう　自己モニター４ 51
14. 言い分けの練習について考えよう　自己モニター５ 56
15. 発音チェックについて考えよう　自己モニター６ 61
16. 活動や教材を点検してみよう　自己モニター７ 66
17. e ラーニングを活用しよう　自己モニター８ 72

Chapter 3　プロソディーの教育を考えるための TIPS 77

18. プロソディーグラフの効果について考えよう 78
19. プロソディーグラフの描き方と使い方について考えよう 82
20. ヤマの重要性を理解しよう　ヤマ０ 86
21. ヤマを聞く練習をしてみよう　ヤマ１ 89
22. ヤマを言う練習をしてみよう　ヤマ２ 92
23. 短い文のヤマのルールを身に付けさせよう　ヤマ３ 95

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

24. 長い文のヤマのルールを身に付けさせよう　ヤマ４ 98
25. 無限にある文のヤマの教え方を考えよう　ヤマ５ 100
26. イントネーションを教える意義を考えよう
イントネーション０ 103
27. 基本的な文末イントネーションを教えてみよう
イントネーション１ 106
28. 「か」の文末イントネーションを教えてみよう
イントネーション２ 109
29. 文末イントネーションとアクセントを教えてみよう
イントネーション３ 112
30. さまざまな文末イントネーションを教えてみよう
イントネーション４ 116
31. 文頭イントネーションを教えてみよう　イントネーション５ ... 121
32. アクセントとその指導方法について考えよう　アクセント０ ... 124
33. 動詞のアクセントについて考えよう　アクセント１ 127
34. イ形容詞のアクセントについて考えよう　アクセント２ 131
35. 複合語のアクセントの教え方を考えよう　アクセント３ 135
36. アクセントを教える意義について考えよう　アクセント４ 139
37. 長い音、短い音の導入を考えよう　リズム１ 143
38. フットを用いた教え方を考えよう　リズム２ 146
39. リズム型の決め方を考えよう　リズム３ 149
40. リズムの具体的な教え方を考えよう　リズム４ 152
41. 母音の無声化と鼻濁音を教えることについて考えよう 155

Chapter 4　学習者の音声を考えるための TIPS 159

42. 国際音声記号の見方を知ろう 160
43. 日本語の音声を知ろう 164
44. 中国語の音声と誤用の傾向を知ろう 168
45. 中国語話者のための練習方法を考えよう 172
46. 韓国語の音声と誤用の傾向を知ろう 175
47. 韓国語話者のための練習方法を考えよう 179
48. 英語の音声と誤用の傾向を知ろう 182

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

49. 英語話者のための練習方法を考えよう 186
50. ベトナム語の音声と誤用の傾向を知ろう 189
51. ベトナム語話者のための練習方法を考えよう 193
52. タイ語の音声と誤用の傾向を知ろう 196
53. タイ語話者のための練習方法を考えよう 200
54. アラビア語の音声と誤用の傾向を知ろう 203
55. アラビア語話者のための練習方法を考えよう 207
56. ポルトガル語の音声と誤用の傾向を知ろう 210
57. ポルトガル語話者のための練習方法を考えよう 214
58. インドネシア語の音声と誤用の傾向を知ろう 217
59. インドネシア語話者のための練習方法を考えよう 221
60. 知らない言語の音声を知る方法を考えよう 224
61. 知らない言語の話者の誤用の傾向を知ろう 227
62. 母語別の誤用の傾向を知ることについて考えよう 229
63. 母語別にこだわらない音声教育を考えよう 232

Chapter 5　よりよい音声教育を考えるための TIPS 237

64. シャドーイングについて考えよう 238
65. モデル会話を音声教育に活用しよう 242
66. ディクテーションについて考えよう 246
67. 文が言えないときの対応について考えよう 250
68. 音声と四技能の関係について考えよう 254
69. 教室内外で音声を使用するときの精神面について考えよう 257
70. 音声教育はどういう時期に行えばいいのか考えよう 260
71. 「教材がない」について考えよう 263
72. 音声学の学び方について考えよう 266
73. 「私は標準語話者ではないから…」について考えよう 269
74. 音声教育に関する教師のビリーフについて考えよう 272
75. 音声教育の実践の共有について考えよう 275
76. 音声教育ができる教師とはどういう教師か考えよう 278
77. 音声教育を行う勇気について考えてみよう 281
本書で扱った 9 言語の国際音声記号対応表 286

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

TIPS!

1 音声教育のニーズについて考えてみよう

自分のクラスの学習者には、音声教育のニーズがないという教師が多くいます。本当に音声教育のニーズがないのか考えてみましょう。

音声教育を行うべきかどうかについて、日本語教師はさまざまな意見を持っているようです。音声教育は必要ないという人さえいます。一体、学習者は、どの程度音声教育を望んでいるのでしょうか。実際に自分が担当する学習者に、「自然な発音・イントネーションで話すことができるようになりたいか」と聞いてみると、「はい」と答える学習者が多いように思います。しかし、「いいえ」と答える学習者がいるのも事実です。それはなぜなのでしょうか。

「いいえ」という回答の理由として、「通じればいい」と思っている学習者もいるかもしれませんが、それよりも、授業やテストの影響を受けて、「いいえ」と回答する学習者のほうが多いでしょう。発音に関することがテストで出題されない、さらに、授業でもほとんど扱われなければ、自然な発音・イントネーションで話せるようになりたいとは、あまり思わないでしょう。

それでも、自然な発音・イントネーションで話せるようになりたい、という学習者は少なくありません。日本語学習者に聞いた学習したいこと 57 項目のうち、「自然な発音・イントネーションで話す」が必要度の順位で第 2 位となったという調査結果もあります[1]。

[学習したいこと上位 8 位]

(1) 敬語を使って話をする。

(2) 自然な発音・イントネーションで話す。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

TIPS! 10 言い分けの独自の基準を考えよう
自己モニター 1

音声教育では自己モニターを活用することが重要です。自己モニターとは何か、自己モニターを活用するとはどういうことなのか考えてみましょう。

自己モニターを活用した音声教育では、「学習者自身が自己のパフォーマンスのどこが問題であるかを認識し、妥当な発音基準を模索しながらそれを元にした適切な自己評価を通して発音を自己修正する[1]」ことが重要です。これを詳しく説明したいと思います。

学習者の母語によって、苦手な発音があります。例えば、韓国人日本語学習者は「ぞ」の発音が苦手で、「ジョ」のようになってしまいます。しかし、英語の“r”と“l”の言い分けができる日本人もいるのと同じように、韓国人日本語学習者でも、「ぞ」「じょ」の言い分けができる人もいます。「ぞ」「じょ」の言い分けが正しくできる韓国人日本語学習者は、各自が、教師から習ったわけではない、以下のような「独自の基準」を持って言い分けていることが明らかになっています[2]。

(1) 口の中で舌の位置を変える。
(2) 「ぞ」は歯茎(しけい)、「じょ」はそれよりも広く舌を付けて発音する。
(3) 「じょ」は舌が下がっている感じで発音する。
(4) 「ぞ」は舌に力を入れ、「じょ」は普通にする。
(5) 「じょ」は力が入るが、「ぞ」は入らない。
(6) 「ぞ」は「ず」から「ぞ」へ、「じょ」は「し」から「じょ」へ発音を移行させる。
(7) 「ぞ」は「そそ」から「ぞ」に移行させる。

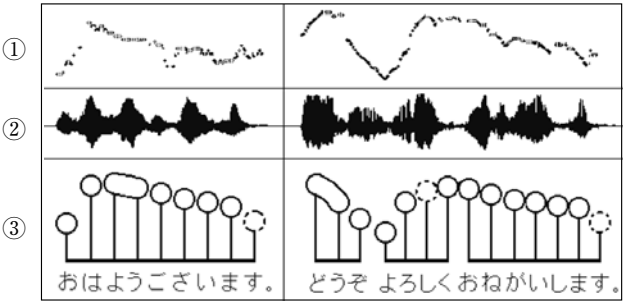
BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

TIPS! 18 プロソディーグラフの効果について考えよう

音声指導の中で、プロソディーは大切なものです。プロソディーとは何か、また、それを示したプロソディーグラフにはどのような利点があるのか考えてみましょう。

個々の音とは、日本語学習者の誤用で言えば、「ツ」と「チュ」、「タ」と「ダ」、「オ」と「ウ」の違いなどのことです。プロソディーとは、アクセントやイントネーション、ポーズなど、高さ、長さ、大きさに関することです。

河野俊之・串田真知子・築地伸美・松崎寛『1日10分の発音練習』(くろしお出版)という教材がありますが、その中で、フランス語の教材などを参考にして、高さを表す曲線を音節ごとに区切って、高さ、長さを表すプロソディーグラフが用いられています[1]。次の3つのうち、プロソディーグラフは、どれにあたるでしょうか。



①は音の高さの変化を機械で物理的に測って表したもので、ピッチ曲線やF0曲線と言われるものです。

②は音声波形と言われるもので、音声が発せられることで、空気

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

TIPS! 42 国際音声記号の見方を知ろう

Tips 43 からは、各言語の音声を学び、日本語と対照して、母語別の問題点を考えていきます。その前に、まずは、子音・母音一般の音声を復習しましょう。

国際音声記号（IPA：International Phonetic Alphabet）は、あらゆる言語の音声を文字で表記するために、国際音声学会が定めているものです。国際音声記号を元に、音声の復習をしましょう。

子音（肺気流）

調音法＼調音点	両唇音	唇歯音	歯音	歯茎音	後部歯茎音	そり舌音	歯茎硬口蓋音	硬口蓋音	軟口蓋音	口蓋垂音	咽頭音	声門音
破裂音	p b		t d			ʈ ɖ		c ɟ	k g	q ɢ		ʔ
鼻音	m	ɱ	n			ɳ	ɲ		ŋ	ɴ		
震え音	ʙ		r							ʀ		
弾き音		ⱱ	ɾ			ɽ						
摩擦音	ɸ β	f v	θ ð	s z	ʃ ʒ	ʂ ʐ	ɕ ʑ	ç ʝ	x ɣ	χ ʁ	ħ ʕ	h ɦ
側面摩擦音			ɬ ɮ									
接近音	w	ʋ	ɹ			ɻ		j	ɰ			
側面接近音			l			ɭ		ʎ	ʟ			

記号が対になっている所は右が有声子音、左が無声子音。■は不可能と思われる調音を表す。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

TIPS! 64 シャドーイングについて考えよう

音声教育でシャドーイングが盛んになってきており、教材も出版されています。シャドーイングとは何か、より効果的に行うにはどうすべきかについて考えましょう。

シャドーイングとは、モデル音声を聞きながら、影(shadow)のように、それをできるだけ同時にそのまま繰り返す活動のことです。似たものとして、モデル音声を聞いてから、すぐに繰り返す「リピーティング」や、テキストを見ながらモデル音声に合わせて声を出す「オーバーラッピング」があります。

シャドーイングは、本来、同時通訳養成の訓練法の１つです。それが外国語教育にも導入され、日本語教育でも盛んになりつつあります。同時通訳養成の訓練でシャドーイングが用いられている理由の１つは、同時通訳では、文法の試験のようにじっくり考える時間はなく、言語Ａを話しているのを聞きながら、頭の中で言語Ｂに訳して話さなければならないために、自動的処理が要求されるからです。そのためには、繰り返し練習することがかなり必要となります。

シャドーイングは、「モデル音声を繰り返す」という簡単で、学習者にも教師にも分かりやすい方法で、特別な教材を使わなくても、いつでもどこででも練習できます。また、特に教室などでの練習中は、モデル音声が次々と出てくるので、さぼることがなかなかできません。シャドーイングは、主に、リスニング能力、スピーキング能力、発音の能力という３つの能力に効果があると言われています[1,2]。

リスニング能力については、まず、単語の発音やアクセント、イントネーションなど、音声そのものの情報を記憶しなければなりません。そのため、ふだんの外国語学習やふだんの外国語生活よりも

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers